

論文

長編小説『白痴』における「情報」と「殺人」の考察

—黒澤明監督の映画を手がかりに

高橋誠一郎

はじめに

今年は、1950年に公開された『羅生門』でヴェネチア映画祭でグランプリを、1954年に公開された『七人の侍』もヴェネチア映画祭で銀獅子賞を受賞し、さらに1975年には日ソ合作の『デルス・ウザーラ』がモスクワ映画祭で金賞を受賞し、翌年にはアカデミー最優秀外国語映画賞を受賞するなど多くの賞を受賞して、国際的に認められた黒澤明監督（1910～98）の生誕100周年にあたる¹。

その黒澤自身が最も高く評価した自作の一つが、精神を患ってスイスでの4年間の治療を受けた後に、混迷した祖国ロシアに帰還した主人公の愛と苦悩を描いたドストエフスキイの四編からなる長編小説を、終戦直後の混乱した時代に危うく戦犯として処刑されそうになるという苛酷な経験をした主人公の物語に置き換えて描いた映画『白痴』（1951）であった。

原作の第一編を扱ったこの映画の前編は、冒頭での北海道に帰還した亀田欽次（森雅之＝ムイシュキン）が、金持ちの愛人となっていた絶世の美女・那須妙子に一目惚れをした大商人の息子の赤間伝吉（三船敏郎＝ロゴージン）との連絡船での出会いから始まる。そして、那須妙子（原節子＝ナスター・シャ）の深い絶望を知りて彼女に結婚を申し込むほどに深く同情するが、自分との結婚で亀田が苦しむことを恐れた那須妙子（原節子＝ナスター・シャ）は、赤間とともに雪の降る中を馬橇で出発するまでの出来事が詳しく描かれていた。

そして後編では、一度は赤間を選びつつも、自分のことを一面的にしか愛せない赤間との結婚には踏み切れず、純粋な亀田への想いを断ち切れない那須妙子の行動から、悲劇にいたる物語を見事にまとめている。

しかし、上映時間四時間二五分という長時間となったこの作品は、観客の入りを重視した経営陣から「暗いし、長い。大幅カットせよ」と命じられ、抵抗したものの押し切られて二時間四六分に短縮された。

前回、筆者は『白痴』の構想が練られた当時のヨーロッパの情勢を分析することによって、この長編小説が有する文明論的な意味を考察した²

本稿では、映画『白痴』やその前年に公開された『醜聞（スキャンダル）』、さらに『七人の侍』を手がかりに、第二編の第一章から第五章までに焦点を絞って詳しく分析することにしたい。

弁護士の資格も取って金儲けに励もうとする狡猾な小役人のレーベジェフや、ムイシュキンに対しては深い友情の念を持つつも、激しい嫉妬から彼をつけ回して殺害しようとしたロゴージンという形象の分析をとおして、ドストエフスキイが「情報」や「殺人」の問題をきわめて深く考察していることを明らかにできるだろう。

一、酔っぱらいの「ペテン師」——レーベジェフ

弁護士とその甥

長編小説の第二編は、六ヵ月後にモスクワから戻ったムイシュキンが、弁護士業も営むようになつたレーベジェフのもとへと急ぎ、ナスター・シャのその後の状況やエパンチン家のことを聞き出そうとする緊迫した状況から始まる。

すなわちムイシュキンは、言を左右にするレーベジェフに対して「嘘をつくのはやめてください。二人の主人に仕えるのはたくさんですよ。ロゴージンがここへ来てもう三週間になることは、私だって知っていますからね。あなたはいつかのときのように、あの女（ひと）をロゴージンに売ってしまったんですか、それともまだなんですか？」と彼にはめずらしく正面から問い合わせる³。

映画の最初の版でも、後編では高利貸しをも兼ねている軽部（レーベジェフ）と亀田との間で写真館の前で、次のような会話が描かれていたのである。

すなわち軽部（レーベジェフ）が、「実は、このところ……我々……哀れな金融業者のかき入れ時でがしてな……」などと弁解していると、亀田は「嘘をつくのはお止しなさい……二股かけるのはもう沢山ですよ」と問い合わせ、軽部が黙り込むと、さらに「で……妙子さんもこっちなんですね」と尋ねる。そして、「……あの極道め。それを自分で嗅ぎつけたんですが……自分で」との答えに対しては「ほんとうですか……あんた何時かの様に、また、あの人を赤間君に売りつけたんじゃないんですか」と確認しているのである。

しかも長編小説の『白痴』では、かつて家庭教師をしていた青年によって家族やメイドなど六人が皆殺しにされた事件についてムイシュキンに尋ねたレーベジェフは、甥のドクレンコをして「じつはこの男がジェマーリン家殺人事件のほんとうの犯人なんです」と語ってムイシュキンを激しく動転させていた。しかもレーベジェフは、その後で「つまりその、譬喻的（アレゴリック）に申しますと、もし第二のジェマーリン家殺人事件がおこったら、その犯人だというわけですな。もしそんなものがおこるとすればですがね。こいつはそれを手ぐすね引いて待っているんですよ」と付け加えたのである（2・1）。

一方、レーベジェフがルキヤン・チモフェーヴィチという自分の名前の名と父称（父親の名前から造られたもの）を入れ替えて、チモフェイ・ルキヤーノヴィチと名乗っていることを明かした甥は、叔父について「真心は持っているんでしょうが、なんといってもペテン師ですよ。これには困りますよ。そのうえ酔っぱらいなんですからねえ」と語った。さらに彼は、「いったいこの家をどうやって手に入れたと思います？ もしこの男があなたをだましたり、これから先もどうやってだまそうかと思案をめぐらしていなかつたら、ぼくは首を切ってさしあげますよ」と誓っていたのである。

ムイシュキンもレーベジェフについて、「あんな人物だとは思いもよらなかった。昔の彼はあんな男ではなかった！」と感じるとともに、最近のロシアで起きた凶悪な殺人事件のことを聞いた彼は、後になんでもレーベジェフから聞いた彼の甥や殺人事件のことが脳裏から離れなくなっていた。なぜならば、4年ぶりに祖国に帰国したムイシュキンは「こうしたことにはすべて異常な注意を払っていた」からである（2・5）。

こうして黒澤は、悲劇の発端には亀田の神経を苛立たせるような発言や行動をしているだけでなく、那須妙子と赤間の関係を意図的に複雑にしようとしていた軽部の存在が深く関わっていたことをきちんと描いていたのである。

映画『醜聞（スキャンダル）』（1950）における『白痴』のモチーフ

興味深いのは、「鉄道関係の仕事で月二十五ルーピルもらってます」と自己紹介していたドクレンコが、弁護士となった叔父のレーベジェフについて、「ありったけの財産五百ルーピルを高利貸にふんだくられたおばあさん」ではなく、「五十ルーピルというお札に眼がくらんだので」、「ユダヤ人の高利貸を弁護した」ことを批判していたことである。しかもドストエフスキイは、自分の「別荘を公爵の手に渡そうとした」レーベジェフについて、「彼の胸算用によると、そのほうがずっと利益が多そうであった。《これからいろんな衝突がおこって、局面がうんと変化するぞ》」と考えたと描いていた。

実際、後にロゴージンに襲われた際に怪我をして倒れたムイシュキンがレーベジェフの別荘で静養していると、そこに自分には受け取った遺産の一部をもらい受ける権利があると要求する青年が現れて騒動が持ち上がる。そこでは「奇怪なる事件が、わがいわゆる聖なる露西亞（ルーシ）において、行われている」とスキャンダラスな形で遺産をめぐる事件を報じた新聞の記事も読み上げられるが、その記事の筆者がレーベジェフであったことが判明するのである。

これらのエピソードは、常識に囚われずに世界の真実の姿を表現しようとする山岳画家の青江（三船敏郎）と有名な若い声楽家・美也子（山口淑子）が、儲けのために雑誌社が起こしたスキャンダラスな報道に巻き込まれる事件を描いた映画『醜聞（スキャンダル）』における弁護士（志村喬）の役割を思い起こさせる⁴。

映画『白痴』の前年に上映されたこの映画は、山歩きに疲れた有名な声楽家を「善意」からオートバイに乗せて宿まで送ったことで、山を見上げるために寄り添うようになったポーズの写真をパパラッチのような写真家に撮られて、でっちあげの記事とともにスキャンダル記事を売り物にする雑誌に掲載されたために、「醜聞」に巻き込まれていく過程とその結末を描いていたのである。

すなわち、清純な声楽家の「愛欲秘話」や「情炎のアリア！」とかき立てた記事の載った雑誌は、ポスター や サンドウイッヂマンなどを使って大々的に広告したことで売り上げを伸ばし、一万部の増刷を決定する。しかも、自分の書いた記事が「テッчи上げ」であることを知っている記者が告訴されることを心配すると雑誌社の社長は、そんなことで裁判になったことはないし、そうなったら「いい宣伝だ。あと1万部増刷するね」と語る。

一方、スキャンダル記事に怒った山岳画家は、雑誌社に乗りこんで社長を殴りつける。この後で映画はこのことを利用して、「僕ア、あくまでも言論の自由のために闘うよ」と語り、さらに宣伝に力を入れようとする出版社の社長と、「暴力を振るったのは確かに悪い」と認めつつも、「あの雑誌の記事は、ありや何だい。暴力以上じゃないか。」と批判を続ける青江の両者の言い分を交互に流すことで緊迫感を高めている。

このような中、世直しの気概に燃える若い画家は、真実を明らかにするために「裁判」に訴えると、前売り券が飛ぶように売れたにもかかわらず、自分の音楽を聴きにくる聴衆のみに歌おうと決心して、「世間の噂」が静まるまでじっと我慢をしようとしてリサイタルをも中止していた声楽家も、事実を明らかにするために裁判に参加するのである。しかし、依頼した弁護士が善人だが酒好きの弱い人間で、雑誌社の社長に買収されたために裁判で二人は次第に窮地に追いやられることになる。

しかもこの映画では、弁護士・蛭田にレーベジェフのような性質を与えただけでなく、彼の娘ヴェーラのように「純真な心」の持ち主である蛭田の娘も描いていた。そして、映画『白痴』では舞台を日本に移したことでの、マイシュキンが語るイスイでの『新約聖書』的な逸話が削られ、ロゴージンの母親は「毎日仏様ばかり拝んでいる」女性へと変えられていたが、映画『醜聞』ではクリスマスの「樅の木」や「清しこの夜」の合唱など、キリスト教的な要素が強く入っており、重度の肺病を患っていた蛭田の娘は、父の回心を願いながら亡くなるのである。

二、絵画『キリストの屍』と死刑の考察

ロゴージンと絵画『キリストの屍』

父から譲り受けた、「どす黒い緑色に塗られた、少しも飾りのない、陰気な感じのする大きな三階建て」の「前世紀の終わりに建てられた」屋敷に住むようになっていたロゴージンは、マイシュキンの突然の訪問に驚くが、それでも家に入れて話を交わす。

この屋敷の一階は両替屋になっており、そこには「両替屋の厄介になっている」去勢派の者が借りていたが、公爵が通された二階の大きな部屋には「皺だらけの黄色い顔」をしたロゴージンの父親を描いた油絵がかかっており、その絵を見たマイシュキンは旧教徒だったかを尋ねる。すると、ロゴージンは父親が「教会には通ってたよ。もっとも、旧教徒のほうが正しいとは言ってたがね」と答え、さらに「去勢派」の連中をずいぶん尊敬してたと答えたのである。

ここで語られている旧教徒（古儀式派、分離派）とは、ニーコンの宗教改革に反対して古い教えを守ろうとした者たちであり、その中でも現世からの逃避傾向の強い過激なセクトが去勢派や鞭身派であった。こうして、ロゴージンとしばらく旧教徒についての論議を交わした後に別の部屋に掲げられている絵画を見たマイシュキンは、「これは——ハンス・ホルバインの模写だね」と語り、「私は一度この絵を外国で見たことがあるけれど、いまだに忘れないよ」と続けている。実際、ドストエフスキイ自身も八月一二日にはバーゼル博物館で、このホルバインの絵画『キリストの骸』（むくろ）を見ていた。

ドストエフスキイ夫人のアンナはこの絵画の印象について、従来の伝統的な描き方に反して、キリストは「やせ衰えて、骨や肋骨が見え、手足には釘が刺された傷あとがあつて、死人のそれのように青くはれあがり、すでに腐爛しはじめており、「この裸体のエチュードは伝説上の受難者を、新たに復活することのできない腐爛した死人として描いている」ので、彼女は「ただ恐怖を覚えただけだった」と書いている⁵。

しかも、そこでムイシュキンは、ホルバインの絵に「感動させられた」と続けていたが、アンナ夫人によればドストエフスキイ自身もキリストの死を美化することを受けつけずに、リアルに描いたホルバインの絵に「すっかり感動して、ホルバインはすぐれた画家で詩人だと言いくつたらいいだった」のである。

そして、この絵については、実は冒頭近くのエパンチンの次女アデライーダとの会話でも触れられており、そこでムイシュキンはギロチンが落ちてくる瞬間の恐怖に満ちた顔を題材にして描いてはどうかという提案をしていた。

一方、この絵を見ながら「おれはあの絵をみてるのが好きだね」と語ったロゴージンは、急にテーマを変えて「あんたは神を信じているかね、どうかね？」と不意にムイシュキンに尋ねた。

これに対して、「人によってはあの絵のために信仰を失うかもしれないのに！」とムイシュキンが驚くと、ロゴージンは「そうでなくても、失われているよ」と答え、「ずっと前からきいてみたいと思ってたんだよ。だって、近ごろは信じないやつが大勢いるじゃないか」と続けたのである（2・4）。

C氏との会話とスペシネフ

ロゴージンはさらに神を信じない人間が多いロシアの方が「他の連中より先に進んでいる」とも考えている者もいると語ったが、この言葉に強い注意を払ったムイシュキンは、一度は別れの言葉を交わしたにも関わらず立ち止まって、この質問に答える形で、最近の二日間に出会った四人の人物との出会いの印象をロゴージンに語っているのである。

その最初の出会いが、「ある朝、新設の鉄道で旅していたとき」に車中で出会ったC氏という人物であり、「この人については前からずいぶんいろいろなこと」を聞いていたムイシュキンは、「何よりも無神論者だってことが心にかかっていた」ので、「私は本物の学者と話ができると思って、とてもうれしかった」と語っている。しかもそのC氏は、「珍しくよくできた人で、私にたいしても、知識や理解力が自分と同等の人人にたいするように話してくれた」のである。

ここで興味深いのは、ロシアのアカデミー版全集によれば、ここで示唆されている無神論者のC氏が、フランスの二月革命後の政治熱がロシアでも過熱した時期にペトラシェフスキイ・サークルの中の分派ともいえるドゥーロフ・グループの実質的な指導者となり、『悪霊』で取りあげられるネチャーエフ事件の「五人組」のような軍隊的な組織を秘密裏に結成しようとしていたスペシネフをモデルにしていることである⁶。

この事件に連座して捕らえられ、8ヶ月にもおよぶ監獄での訊問のあとで、偽りの死刑判

決によって死刑場まで引き出されたドストエフスキイは、その執行寸前に「皇帝による恩赦」という形で罪を減じられるという経験をしていた。

後にドストエフスキイは刑場で死刑の判決を聞いた時の気持ちを『作家の日記』にこう記した。「しかし、私達が裁かれた事柄、私達の精神をとらえた考えは、後悔を要しないものと思われたばかりか、何か私達を済めるもののように、私達に多くのことを許してくれる殉教の対象のように思われたのだった」⁷。

ゲルツェンが記しているように当時のロシアの社会主義者達は、方法こそは違うが自分たちもキリストのように社会正義を求めており、それゆえに、処刑されたキリストや使徒達と同じように迫害されているという意識が強くあったのである。

それゆえ、ペトラシェフスキー・サークルのメンバーであったリヴォフの証言によれば、刑の執行直前にドストエフスキイは同じく死刑囚だったスペシネフに、死刑の非人道性を強く訴えたユゴーの『死刑囚最後の日』を思い出しながら、「ぼくらはキリストと共にあるだろう」と語りかけていた。しかし、「英雄的な死」を考えていた若きドストエフスキイに対してスペシネフから返ってきたのは、「一握りの塵さ」という返事だったのである⁸。

このことを想起するならば、ドストエフスキイが『白痴』の冒頭で、ムイシュキンに死刑を体験した男の次のような話を語らせたとき、自分自身の体験とスペシネフとの会話を思い起こしていたことは確実だと思える。

「その男は当時のことをおそろしいほどはっきりと覚えていて、この数分間の出来事は決して忘れる事はないだろう、と言っていました。群衆や兵士たちに取りまかれた処刑台から、二十歩ばかりのところに、柱が三本立ててあったそうです。処刑される者が数人いたからです。まず最初の三人をひきずりだして柱に縛りつけ、死刑服（白いだぶだぶした長い上張り）を着せ、それから小銃が見えないように、白い頭巾を眼の上までかぶせました。それがすむと、それぞれの柱の前に数人の兵士からなる一隊が整列しました。私の知合いの男は前から八番目に立っていたので、つまり、三度目に柱のほうへ連れていかれることになっていたわけです」（1・4）。

つまり、ドストエフスキイにとって「腐爛していく死体」は、きわめて切実なテーマだったのである。それゆえC氏と語ったムイシュキンも、その人とは四時間ばかりも話しこんだが、「私がびっくりしたのは、なんだかはじめから終りまで、まるで見当ちがいの話を聞かされているみたいだったこと」で、それを彼にも言ったが、「那人にはまったく通じなかつた」と続けているのである。

三つの出会い——殺人者、酔っぱらい、百姓女

こうしてC氏との会話をについて語ったムイシュキンは、次にホテルで起きた前日の殺人事件について語る。ここで興味深いのは、映画『白痴』では赤間（ロゴージン）が初対面の際に亀田（ムイシュキン）のことを「生まれたての羊の子」に喩えていたが、その犯人も時計が欲しくなったという理由だけで、「主よ、キリストに免じてゆるしたまえ！」と言いながら、殺人者が「ただ一刀のもとに自分の友だちを、まるで羊でも斬り殺すように斬り殺し

て、相手の時計を奪った」（傍点引用者）のである。

この話を聞くとロゴージンは「まるで何か発作にでも襲われたように」、大声をたてて笑い、「いや、おれはそういうやり方が好きだね！」と語ったが、その笑いはしばらく収まらなかった。

さらにムイシュキンは、その翌日の朝には酔っぱらいの兵隊から、「旦那、銀の十字架を買っておくんなさいよ。たったの二十コペイカでお譲りしますよ」と言わされて、それが「まがいもなく錫」であり、その兵隊が「自分の十字架を売りとばした金で一杯ひっかけに」言っただけのことを見ぬきながらも、それを買い取ったことを語る。

そして、「このキリストを売った男を非難するのは、もうすこし待とう」と道を歩きながら、考えたと伝えたムイシュキンは、ロシアを現す古語のルーシ（Русь）という単語を用いながら、自分は外国にいた五年間も、この国についてさまざまな思いを抱き、「ルーシにやってきて以来どつとわが身にふりかかってきた最も強い印象で胸がいっぱいになっていた」とロゴージンに語ったのである。

そのようなムイシュキンが宿に帰ろうとしていたときに出会ったのが、乳児を抱えた百姓女であった。彼女が信心深そうに十字を切ったのを見て、どうしたのかとムイシュキンが尋ねると、その女性は「はじめて赤ちゃんの笑顔を見た母親の喜びっていうものは、罪びとが心の底からお祈りするのを天上からごらんになった神さまの喜びと、まったく同じことなんんでして」と答えたのである。

このエピソードを語ったムイシュキンは、この言葉を百姓女が言ったことを強調しながら、「じつに深みのある、デリケートな、真に宗教的な思想じゃないか」と語り、ここには「キリストの最も重要な思想がことごとく」表現されているとロゴージンに説明している。そして、「宗教的感情」の重要性を強調しながらムイシュキンは、「肝心なことは、この何ものかがロシア人の心に、誰よりもはっきりと眼につくということなんだ」と主張している。

この意味で注目したいのは、イギリスの研究者ピース氏がレーベジェフの娘であるヴェーラ（Bepa）の語義が「信仰」であり、彼女が胸に抱いている幼子リュボーフィ（Любовь）の名前が「愛」を意味していることにもふれつつ、ドストエフスキイが『白痴』において、ナスターシャやアグラーヤの美しさと対照しながら、普通のロシア人の女性であるヴェーラの肯定的な美しさを強調していることを指摘していることである⁹。

つまり、ドレスデン美術館でホルバインの聖母やラファエロの傑作「聖シストの聖母」を鑑賞して深い感銘を受けていたドストエフスキイは、ロシアの民衆がそのような「美」を理解する深い能力を持っていることを強調していたのである。こうして、ドストエフスキイは四時間も語りながらムイシュキンを納得させることができなかつた「知識人のC氏」の思想と、「百姓女」の「宗教的感情」とを鋭く対照していたのである。

十字架の交換のエピソード

実際、「百姓女」の話を聞き終わったロゴージンは、別れ際に「兵隊から買った例の十字架は、いま身につけているのかい？」と尋ね、「かけたいのさ。そのかわり、自分のをはず

すから、あんたかけろよ」とムイシュキンに提案しているのである。

するとムイシュキンは、「十字架を取つかえこしたいんだね？　いいよ、パルフヨン、もしそういうことなら。いや、うれしいよ。これで兄弟の契りができたじゃないか！」と語つて、早速、自分の「錫の十字架」とロゴージンの「黄金（きん）の十字架」の交換をするのである。

この「十字架の交換」の場面は、殺されたリザヴェータと十字架と聖像とを交換していたソーニヤが、ラスコーリニコフに自首を勧め、次に彼が来たときには無言で、「自分も十字を切り、彼にも十字を切ってやって、糸杉の十字架を彼の胸に」かけたという『罪と罰』に描かれた「十字架の交換」のエピソードを想起させる。そして、ソーニヤが自分が殺したリザヴェータから貰った真鑑の十字架を自分が首にかけていることを確認したラスコーリニコフは、自分のリザヴェータ殺しの罪をソーニヤがいっしょに負おうとしているのを実感し、ソーニヤに言われたように血で汚してしまった「大地」に接吻をしたあとで自首したのである¹⁰。

すなわち、ここでロゴージンが突然、「十字架の交換」を提案したのには、その直前にムイシュキンが「キリストの最も重要な思想がことごとく」入っていると伝えた「百姓女」の「宗教的感情」に心を動かされていたからだと思えるのである。

実際、別れたあとでホルバインの『キリストの屍』を「見るのが好きだ」と言ったロゴージンの言葉を思い出しながら、ムイシュキンは「ほんとは好きではなくて、ながめずにはいられぬ要求を感じているのだ」と考える。そして、「ロゴージンは単なる情欲だけの人間ではない。彼はいずれにしても、人生の闘士なのだ、彼は失われた信仰を力強く取りもどそうと欲しているのだ」と考察を続けていたのである（傍点引用者、2・5）。

このことの意味は、『カラマーゾフの兄弟』で尊敬するゾシマ長老が亡くなった後で腐臭が漂ったことから衝撃を受けたアリョーシャが、その死体の腐臭という事実と対峙しながらも、生前のゾシマ長老の「記憶」を呼び起こすことで、長老が語った「理念の普遍性」を確信して立ち直るというエピソードを考えることで明らかになるだろう。

つまり、ロシア正教の信者であったドストエフスキイにとって、腐爛した「キリストの死体」を直視することは、現実に躊躇（つまづ）くことではなく、むしろ「信仰」の意義を再認識することだったといえるだろう。

一方、『白痴』を日本に置き換えて撮った黒澤は、この「十字架を交換する場面」を、「お守り」と刑場での「石」との交換へと変更している。そのことによって黒澤は、「殺すながれ」という理念が、キリスト教だけでなく、仏教や社会主义においても共有される「普遍的な理念」であることを視覚的に示していたのである。

三、「大地主義の理念」とロゴージン

ロゴージンの「新しい」解釈

しかし、別れ際に息を切らしながら「もしそれが運命の約束なら、あんたがあの女をとれよ！」と言って、自分の「欲望」を断ち切ろうとしたロゴージンは、ムイシュキンと別れた

後では、なんとしてもナスター・シャを自分のものにしたいという「欲望」に再び突き動かされて、彼のあとをつけ回してナイフで刺し殺そうとする。しかし、その瞬間にそれまでの緊張からてんかんの発作を起こしたムイ・シュキンが激しい痙攣からなんともたとえようない悲鳴をあげて倒れて階段から転げ落ちたことに驚いてロゴージンはホテルから立ち去ったのである。

ところで、ドストエフスキイは不意に自宅を訪れたムイ・シュキンから「例の結婚式はここで挙げるつもり？」と質問された際に、ロゴージンが「こ、ここだよ」と、「身体をぎくりと震わせて」答えたと描いていた。

これらの描写と会話に注意を促した江川氏は、ロゴージンがナスター・シャと「二人で過ごした時間はけっして少なくはないが、いずれの場合をとっても、二人が肉体的に結ばれた形跡はない」ばかりか、ペテルブルグの女性教員のもとで間借りしていた時期には、「ロゴージンはほとんど毎晩のように彼女を訪れていたが、やってきて、することと言えば、なんと、トランプの勝負であった」ことにも注意を向けて、「ようやく自分だけのものになったはず」の「彼女とトランプの勝負にうつつを抜かしていることができたのだろうか」と問い合わせ、ロゴージンがすでに去勢していく「性的に不能らしい」可能性を指摘している¹¹。

たしかにイギリスのすぐれた研究者ピース氏は、1971年に著した著書で作品の構造や言語的なレベルからの考察をとおして、ドストエフスキイが多くの作品で分離派（古儀式派、旧教）や、その過激なセクトである去勢派や鞭身派に言及していることを明らかにしていた。たとえば、ナスター・シャの名前やロシア独自の父称などに注目して、ドストエフスキイがナスター・シャ・フィリップ・ボーナと鞭身派との関係に示唆していると解釈し、ロゴージンについても彼のパルフョンという名前が、ギリシャ語で「童貞」を意味する「パルテノス」を語源とすると記していた¹²。

さらに、『カラマーゾフの兄弟』の考察では、スメルジャコフが「クラムスコイの『観照する人』にもたとえられている」ことや、彼の部屋が「ベーラヤ・イズバー」（白い小屋）と「わざわざ引用符でくくって表現されている」ことに注意を向けて、「父殺し」を行ったスメルジャコフが去勢派に属している可能性が強いことを強く示唆していた¹³。

たしかに、『カラマーゾフの兄弟』が『ロシア報知』に掲載された1880年には、以前から交際していた保守的な政治家で、ロシア正教以外の宗教の価値を認めなかつたポベドノースツェフが、ロシアの教育と宗教を総括する総務院の総裁となっていた。それゆえ、このころには再び厳しさを増していた検閲のために、ロシア正教の異端とされた旧教徒をも否定的に描かざるをえなくなっていたと思える¹⁴。去勢派などとの関わりが強く暗示されている『カラマーゾフの兄弟』におけるスメルジャコフの否定的な形象はこのような時代状況のなかで生み出されたのである。

それゆえピース氏の考察に依拠しながら¹⁵、分かりやすく作品を分析した「『謎とき「カラマーゾフの兄弟」』（1991）は、専門家にも説得力のある著作となっていた。しかし、江川氏が『謎とき「白痴」』（1994）においてスメルジャコフ像に引き寄せた形で、ロゴージン像を読み解くことには無理があると思われる。

なぜならば、ニコライ一世の「暗黒の30年」に検閲などを厳しく批判して西欧的な価値観を主張する「西欧派」の作家として出発したドストエフスキイは、シベリア流刑後のクリミア戦争敗戦後の混乱した時代には、兄ミハイルとともに雑誌『時代』を発行し、「西欧派」でもロシアの古い価値観を主張するスラヴ派でもなく、西欧的な価値観とロシア的な価値観の融合を試みる「大地主義」(土壤主義)を唱えていたのである。

しかも、ロゴージンに、「この恋がおこらなかうたら、きっときみはこの親父さんと寸分たがわぬ人物になっていただろう」と語り、「ただ金もうけに汲々としていただろうとね。まあ、ときには大昔の本に関心して、ほめちぎったり、二本指で十字を切ることに興味をもつたりしてね」と続けていたムイシュキンは、「もっともこれは、もうだいぶ年をとったから、の話だけれども……」とも付け足していた(傍点引用者、2・3)。

つまり、ムイシュキンはたしかにロゴージンが父親と同じように「去勢派」に強い関心を示すようになる可能性を示唆してはいたが、テキストに従うならば、それは彼がナスター・シャに出会わないままに、集めた金を数えながら年齢を重ねた場合に限られるのである。

しかも、ムイシュキンからナスター・シャとの結婚式が「もうすぐ」行われるのかと質問されたロゴージンは、「おれしだいじゃないってことぐらいわかるじゃないか?」と苛立ちはがら問い合わせていた(2・3)。

トーツキイによって「囮い者」にされたことで深い心理的な傷を負っていたナスター・シャはロゴージンに、「あたしはどうしてもあんたがいやだというのじゃありません。ただ自分で気のすむまで待ってほしいの。なぜって、あたしはまだまだ自由な女だから。もしあたしが望みなら、あんたも待たなくちゃだめよ」と宣言していたのである。

歴史書を読むロゴージン

この意味で重要だと思えるのは、ロゴージンと別れた後でムイシュキンが、「ロゴージンが本を読んでいる——いったいこれが『あわれみ』じゃないというのか、『あわれみ』のはじまりではなかろうか!」と歩きながら考えていることである。

そして、後に「プーシキンという名前すら知らなかった」ロゴージンとともに、モスクワでプーシキンの作品をすっかり読んだだけでなく、「腹蔵なく話あった」と語ることになるムイシュキンは(4・7)、「彼は苦惱することも同情を寄せる事もできる大きな心も持っている」と考え、さらに「同情はロゴージン自身の眼を開かせ、彼を教えさとすであろう」と想定したのである(2・5)。

実際、ロゴージンの家で彼の父親の肖像画やホルバインの絵画『キリストの屍』についての会話をを行う前に、ムイシュキンはテーブルの上に「二、三冊の書物」があり、「そのなかの一冊はソロヴィヨフの歴史で、読みかけのところにしおりがはさんであつた」ことに気づいていたのである(2・3)。

そして、学校教育を受けておらず、「まだ一度も世界歴史を習ったこと」がなかったために、ローマ法王についても知らなかったロゴージンに「すこしは自分に教養をつけたらどう? せめてソロヴィヨフの『ロシア歴史』ぐらい読んだらいいのに」と語りかけたナスター

ーシャは、「あたし最初どんな本を読んだらいいか、リストみたいなものを書いてあげましようか」と続けて彼の勉強を手助けしようとしていたのである（2・3）。

つまり、最も大金を積んだロゴージンによって「競り落とされた」ナスター・シャは金の力によって彼の妻になることを納得せずに、ロゴージンが歴史や文学についての教養も持つ青年になるまで待つと告げていたことになる。

しかし、ナスター・シャと出会ったことでロシア文学や世界史へも視野を向ける可能性が生まれたにもかかわらず、自己の「欲望」に囚われたロゴージンは、「金銭」を所有するのと同じように「ナスター・シャ」を所有しようとしたことにより、悲劇への道を突き進むことになったのである。

一方、ドストエフスキイが生涯にわたって深く尊敬していたブーシキンは、政府の厳しい方針によって、農民がますます農奴化していくような状態に反対して分離派教徒のプガチョフが起こした大規模な反乱の地域を訪れて『プガチョフ史』を書き、さらに、この時の取材をもとに1836年には歴史小説『大尉の娘』を書いていた。この『プガチョフ史』は、「プガチョフのような人物に歴史はない」との判断で『プガチョフ反乱史』と改められたが、『大尉の娘』でブーシキンは反乱という方法には批判的な態度を保ちながらも、反乱を起こすようなエネルギーを持ったプガチョフの人間的な側面をいきいきと描き出していたのである。

しかも、ドストエフスキイは『冬に記す夏の印象』（1863年）において、『プガチョフ史』や歴史小説『大尉の娘』を書き上げただけブーシキンを「富裕な地主の子として生まれながら、プガチョフを見抜き、プガチョフの魂に浸透した」と讃えている¹⁶。このことに留意するならば、流刑以降にはブーシキンのうちに「貴族」と「民衆」の和解という理念の実行者としての側面を強く見たドストエフスキイが、マイシュキンに名門の貴族の出でありながらも、民衆の気持ちを驚くほど深く理解できたブーシキン的な性質を与えていたと言えるだろう。

『酔いどれ天使』から『七人の侍』へ

一方、黒澤明は映画『白痴』において、三船敏郎に自分の欲望のためにはすべてのものを破壊し尽くしかねないエネルギーを持つとともに、純粋な人間には心を開く男として赤間（ロゴージン）を演じさせていた。この意味で興味深いのは、1948年に公開された『酔いどれ天使』において黒澤が、敗戦後間もない貧しい地域を背景に、肺病に冒されて自棄になる三船が演じるヤクザと、荒々しいそのヤクザの内に更生の可能性を見出し、何とか体だけでなく精神も治療したいと願う医師（志村喬）の関係を描いていたことである。

さらに1954年に公開された映画『七人の侍』においても、黒澤は出世して侍になりたいという強烈な望みを持ち、奪ってきた侍の家系図から元服前の名前であることも知らずに菊千代と名乗っている農民出身の若者の役を三船敏郎に演じさせている。

しかも、それまでの三船が演じてきた役柄の多くは、民衆的な強いエネルギーを持ちながらも、自分が持つそのエネルギーの方向性を知らずに破滅していく役であった。しかし、『七人の侍』において演じたのは、赤ん坊の頃に捨てられたことで世間の荒波にもまれてき

たので乱暴だが、純真な気持ちも保持しており、勘兵衛（志村喬）というよき指導者に巡り会えたことで、野武士の群盗から百姓たちを守るという仕事に生きがいを見つめた若者の役であった。

しかも、依頼者の百姓たちが落ち武者狩りをしていたことを知った浪人の勘兵衛たちは怒って去ろうとするが、菊千代は百姓たちをそうさせたのは戦いや略奪を繰り返してきた侍だと叫んで、百姓たちの気持ちを代弁したのであった。

そして黒澤は、菊千代の壮烈な戦死を描いたあとでは百姓たちの田植えの場面を大写しにすることで、人間と大地とのつながりを示すとともに、戦いを勝利に導いた勘兵衛に「勝ったのは百姓だ」と言わせているのである。ここには、クリミア戦争敗戦後の混乱した時代に、西欧的な価値観とロシア的な価値観の融合を唱えていたドストエフスキイの「大地主義」の理念にたいする黒澤の深い理解が感じられる。

四、ロゴージンの復活

裁判におけるロゴージンと分離派教徒のペトロフ

このような解釈は強引すぎるように感じられるかもしれない。たとえば江川卓氏は、ドストエフスキイが「本当に美しい人」と考えたキリストが、ホルバインの絵では「屍」として描かれていることに注意を向けて、この絵画との出会いは、「『白痴』の構想の決定にときわめて重要な意味をもつ出来事であった」と解釈している¹⁷。

また、このような解釈を推し進めた亀山郁夫氏も、「この絵を見るのが好きだ」といったロゴージンはこの絵を見ながら、「そこに去勢派のキリストであるムイシキンが磔刑によって受けた苦しみを感じとり、折にふれて倒錯的な快感に満たされていたのではないしょうか。まさに去勢派の末裔たる血です」と断言している¹⁸。

たしかに、流刑先のシベリアで自然や民衆とのふれあいによって「生きる」ことの意味を実感したラスコーリニコフが復活することをその「エピローグ」で描いていた『罪と罰』とは異なり、『白痴』にはこのようなエピローグがないために、読者にとっては分かりにくい結末になっている。

しかし映画『白痴』の脚本には、赤間の家を訪れて殺されてしまった妙子（ナスター・シャ）の死体を見つめた「亀田の眼から無限の哀愁をこめて涙があふれる」と書かれていた。

このことは、黒澤がここで妙子を殺してしまった赤間を、終わった人間として見ているのではないことをも物語っていると思われる。事実、ドストエフスキイはムイシキンにロゴージンを「人生の闘士」と考えさせていたが、そのロゴージンは自分の病気が全快した後で行われた裁判で、何も弁解をせずに「この犯罪の状況をきわめて微細な点まで想いおこし、明瞭かつ正確に確認」し、それゆえ「彼は情状酌量されて、十五年のシベリア流刑を宣告された」のである。

しかも、この長編小説の冒頭では、父親の仕打ちを弟のせいだと考えて、「このおれを誰よりもいちばんひどい目にあわせたのは弟のやつ」なので、弟をシベリア送りにしてやるとロゴージンはムイシキンに語っていた。しかしこの裁判の後では、「彼の莫大な全財産」

が、「そっくり弟のセミヨン・セミヨーノヴィチのもの」となったという知らせは、ロゴージンを「大いに喜ばせた」と書かれているのである（4・12）。

この意味で興味深いのは、ドストエフスキイ自身の流刑体験を元に描いた長編小説『死の家の記録』には、教練の際に連隊長になぐられたことから逆上し、「白昼、散開した兵士たちの目のまえで、連隊長をいきなり刺し殺し」てこの監獄に投獄されたペトロフという囚人も重要な登場人物として描かれている。

しかも、囚人の中でも「いちばん命知らずの男」と恐れられ、監獄における非人間的な扱いに囚人たちが抗議に立ち上がった際には、その指導者となったことが描かれているこの男に、一八六一年に起きたカザン県の農民騒乱の中心人物で、この当時「第二のプガチョフ」とも呼ばれた分離派教徒のペトロフと同じ名前が与えられているのである¹⁹。

このペトロフは貴族出の主人公ゴリヤンチコフに対してはやさしく接しただけでなく、一八四九年に大統領となったルイ・ナポレオンについて、「あれは一二年に攻めてきたやつと親戚じゃないかね」と問うだけでなく、「いったい、世間の噂では、どんな大統領ですかね？」と尋ねるなど、教養がないにもかかわらず世界史にも強い関心を払っているのである²⁰。

このように見てくるとき、有り余るようなエネルギーを持つつも、それをどのような方向に用いればよいかを知らない若者であったロゴージンの形象には、分離派教徒のペトロフの形象が強く反映していると思われるのである。

「記憶」という力

こうして、判決の内容を記すことでドストエフスキイは、殺人の罪でシベリアの監獄に送られることになるロゴージンもまた、大都会のペテルブルグからシベリアに流刑されたことで自然の輝きを知り、復活する可能性があることを強く示唆していたと言えるだろう。

映画『白痴』の終章を「エピローグ」と名付けた黒澤も、そこで亀田（ムイシュキン）を見舞った薫（コーリヤ）に、「いいんだ……僕……あの人気がとてもいい人だったって事だけ覚えていくんだ」と語らせ、それを聞いた綾子（アグラーヤ）にも「そう！ ……あの人様に……人を憎まず、ただ愛してだけ行けたら……私……私、なんて馬鹿だったんだろう… …白痴だったの、わたしだわ！」と語らせている。

記憶をテーマとした二人の会話は、『カラマーゾフの兄弟』の結末でのアリョーシャたちの会話をも彷彿とさせ、映画『白痴』が『カラマーゾフの兄弟』をも視野に入れていることが感じられるのである。

注

*1 『THE KUROSAWA 黒澤明全作品集』、東宝株式会社事業部出版事業室、一九八五年。

*2 高橋誠一郎「ドストエフスキイの『白痴』とその時代——ロシアの独自性の模索」『文明研究』第27号、2008年、62~72頁。

- *3 Достоевский Ф.М. Полн.собр.соч.:В 30 т.Л., Наука. Т.8 (訳は木村浩訳の『白痴』により、同書からの引用は、本文中に編と章をアラビア数字で記す)。
- *4 『全集 黒澤明』岩波書店、第3巻、1988年参照。
- *5 アンナ・ドストエフスカヤ、木下豊房訳、『アンナの日記』、河出書房新書、1979年、95頁。
- *6 Достоевский Ф.М. Полн.собр.соч.:В 30 т.Л., Наука. Т.9.С.441。
- *7 ドストエフスキイ、『作家の日記』上、162頁
- *8 リヴォフ、小泉猛訳「ペトラシェフスキイ事件覚書」、原卓也、小泉猛編訳『ドストエフスキイとペトラシェフスキイ事件』、1971年、174頁。
- *9 Richard Peace "Dostoyevsky An Examination of the Major Novels", Cambridge University Press, 1971, p.97-98. (republished, Bristol Classical Press, 1992)
- *10 高橋誠一郎『「罪と罰」を読む（新版）——〈知〉の危機とドストエフスキイ』、刀水書房、2002年、151頁参照。
- *11 江川卓『謎とき「白痴」』新潮選書、1994年、179－181頁。
- *12 Richard Peace,ibid.p.84-85.
- *13 Ibid.p.261-262.
- *14 高橋誠一郎「『文明の衝突』とドストエフスキイ ——ポベドノースツェフとの関わりを中心に」『ドストエフスキイ広場』第17号、2008年、66～86頁。
- *15 江川卓「『謎とき「カラマーゾフの兄弟」』新潮選書、1991年、154～160頁。
- *16 高橋誠一郎『欧化と国粹——日露の「文明開化」とドストエフスキイ』刀水書房、2002年、78頁。
- *17 江川卓『謎解き「白痴」』、13頁。
- *18 亀山郁夫『ドストエフスキイ 父殺しの文学』下巻、NHK出版、2004年、59頁。
- *19 石川郁男『ゲルツエンとチャルヌイシェフスキイ ——ロシア急進主義の世代論争』未来社、一九八八年、194～6頁。
- *20 ドストエフスキイ、工藤精一郎訳、『死の家の記録』、第一部第七章。